

名古屋大学留学生センター地域貢献特別支援事業

小中学校教員・日本語ボランティア研修会 「文化間を移動する子どもたちのことばと学び」

浮 葉 正 親

はじめに

愛知県をはじめとする東海地域は、日本語を第二言語として学ぶ、いわゆる「日本語指導を必要とする外国籍児童生徒」が全国でもっとも多い地域である。小中学校教員だけでなく、地域のボランティアも日本語教育に積極的に関与している。学校現場ではさまざまな創意工夫が試みられており、それなりのノウハウも蓄積されているのではないと思われるが、それらの情報に接することは難しい。

そこで、この研修会では、年少者の日本語教育に長年携わってこられ、昨年度から愛知県でもJSL(第二言語としての日本語)教育の実践に関わっていらっしゃる齋藤ひろみ氏(東京学芸大学教育学部准教授)を講師に迎え、教科学習を中心にした内容重視の日本語教育の方法を具体的に教えていただき、また愛知県下でのさまざまな取り組みを現場の先生方に紹介していただきながら、齋藤氏からアドバイスをいただくことにした。

なお、この事業は総長裁量経費(地域貢献特別支援事業)の支援を得て実施された。

【参加者】

平成20年2月2日、愛知県三の丸庁舎8F大会議室で、小中学校教員・日本語ボランティア研修会「文化間を移動する子どもたちのことばと学び」を開催した。参加者は、小中学校教員21名、語学相談員および教育委員会など学校関係者17名、日本語ボランティア現職者49名、その他(日本語ボランティア希望者、大学教員、大学院生等)21名、これに主催者側のスタッフ8名を加えて、計116名である。齋藤ひろみ氏の講演『「学習に参加する」ためのことばの力を育む—文化間を移動する子どもたちへの内容重視の日本語教育』に続き、

(財)愛知県国際交流協会の野村一彦課長から会場の2階にある「日本語リソースルーム」の紹介があり、休憩を挟んで参加者との質疑応答が行われた。(案内チラシ参照)

【講演】『「学習に参加する」ためのことばの力を育む—文化間を移動する子どもたちへの内容重視の日本語教育』

講師:齋藤ひろみ氏(東京学芸大学教育学部准教授)
(要旨)

国内で第二言語として日本語を学ぶ子どもたちには、外国籍の子どもばかりでなく、国際結婚家庭の子どもや移民型外国人家庭で日本国籍を取得した子どもたち、あるいは海外生活経験の長い日本人家庭の子どもなど、日本籍の子どもたちも含まれます。したがって、彼らの日本語教育を考えると、「文化間を移動する」という捉え方が重要になってくるのです。

子どもの場合、教室でさまざまな経験や概念を知ることが「ことばの学習」と同時進行で行われます。子どもたちは「ことば」を獲得するだけでなく、日本の社会に参画していくためのさまざまな約束事を学んでいきます。したがって、内容(教科学習を中心にした)を扱いながら日本語の力を伸ばしていくという、〈内容重視の日本語教育〉が注目されています。子どもにとって意味のある内容を、場合によっては母語の力も利用して学んでいくことがもとめられるのです。内容を理解するための参加型の学習、ただ与えられるのではなく、自分も何かをしながら理解した内容を表現していくような学習が注目されています。理論的には、子どもの言語獲得の特徴や第二言語習得、認知学習の分野でもたとえば協調学習(他者と関わりながら学ぶこと)、機能言語学の成果が参考となりますが、それらについてはそれぞれの参考文献をご覧ください

だければと思います。

今日のお話では、日本国内の内容重視の日本語教育の実践例として、私が以前勤めておりました中国帰国者定着センターの「日本語と教科の統合教育」(算数・社会・理科)、岡崎暉先生が中心になっておられるお茶の水大学の「母語・日本語・教科相互モデル」、そして、いろいろご批判はあるのですが、文部科学省の「学校教育における JSL カリキュラム」の三つをご紹介します。

まず、中国帰国者定着センターの「日本語と教科の統合教育」(算数・社会・理科)ですが、ここは一般の学校と違い、四ヶ月間(現在は六ヶ月間)集中的に、日本の小中学校の教科内容を体験的に学び、その基礎知識・技能を身につけ、教科の活動に参加することに親しみ、日本語で思考する力を養うことを目指します。大切なのは、体験的に学んで親しむということです。内容選択とカリキュラム構成の考え方は、彼らがすでに学んだ内容を日本語でどのように表現するかということから学び、その後未知の内容を学ぶ、ということになります。各教科の典型的な学び方を経験させるための内容選択をしています。そして、学年・領域ごとに教科の基礎・基本を三時間くらいにまとめて次々と学びます。既習であればそれでもいいのです。ですから、ここは一般の学校とは違います。授業の展開は、動機付けから用語の導入を行い、体験型の活動を行います。後でお見せするビデオでは、地図帳の統計表を読んで、それをシートに書き込み、それを地図帳に色を塗って表す、ということを行います。本当に体を動かすという体験だけではなく、操作をしたり活動することを「体験的」と呼んでいるのですが、そこで調べたことや分かったことを最後に発表・報告します。教室活動の特徴としては、hands-on(具体物を使ったり、作業をしたり、体験を重視する)という言葉でまとめられます。

次に、お茶の水大学の「母語・日本語・教科相互育成学習モデル」です。ここでは、母語で教科の知識概念を形成し、それを日本語で理解可能としながら、母語・日本語・教科学習を相互育成するのがねらいです。内容は、認知面、言語面、情意面、社会面、文化面のニーズにあった内容を選びます。学校のカリキュラムに先行して、その内容を母語で学び、その後同じ内容を日本語で学習します。ここまでは学校ではなく、LAMP という NPO 団体がします。教師は母語話者と

日本語話者がチーム・ティーチングをします。内容理解・知識・概念形成はまず母語で行うというのがここでの考え方です。

最後に、文部科学省の「学校教育における JSL カリキュラム」について、簡単に紹介します。これまで教科との関連を中心に考えてきたのですが、学び方に焦点を当て、学校における学習活動に日本語で参加する力(学ぶ力)を育むことをねらいとしています。内容については、子どもたちの実体に即して、「トピック型」のもの、「教科志向型」のもの二つを用意しています。トピック型とは、子どもたちの興味・関心に基づき、それと関連したものを学ぶという考え方です。授業の流れは、体験、探求、発信という形になっています。一方、教科志向型とは、教科内容を扱い、そのスキルを子どものレディネス(準備状態)に応じて選択するというものです。各教科の代表的な授業展開を学びます。どちらの場合も、学習を組み立てるための道具として、活動を単位化したものを提案しています。たとえば、「比べる」という活動であれば、日本語ではどんな表現が必要かと考えます。まず活動があって、それに参加するための日本語表現を学ぶというのが JSL カリキュラムの基本的な考え方なのです。

これまで〈内容重視の日本語教育〉の三つの実践例を紹介しましたが、内容重視の言語教育の特徴をまとめてお話し、皆さんの活動の参考にしていただければと思います。一つ目は「シェルター型」と呼ばれていますが、少数派言語の子どもたちを集め、メインストリーム(一般の学校の教育課程)の教科カリキュラムを少数派言語の子どもに合わせて調整して実施するというものです。次に、「補修型」というのは、メインストリームの教科カリキュラムと並行して実施されるもので、その授業に参加できるように、別の教室で言語面での補修を行うというものです。これはボランティアの教室でできるものかもしれませんね。三つ目は「テーマ型」と呼ばれていますが、少数派言語の子どもたちのためのプログラムを作成して実施するというものです。たとえば、私が見に行ったアメリカのイリノイ州の学校では、昆虫というテーマで二ヶ月弱ぐらい毎日授業があるのですが、今週はカブトムシと蝶々を比べる、次の週は顕微鏡で体の部位を調べ、その次の週には昆虫採集に出かけるという具合です。日本の学校では難しいかもしれませんが、テーマの扱い方を短くすれば、JSL カリキュラムの「トピック型」とも通

じる考え方だと思います。

最後に、内容重視の日本語教育については、「内容」の捉え方をもう少し広く取った方がいいのではないかと、という議論があります。教科学習の内容を中心に考えていきますと、どうしても学校の中の勉強に目が向いてしまいます。しかし、子どもたちにとって意味のある内容というのを考えていくと、子どもたちの発達状況・生活実態・将来の見通し等に合わせてテーマを選んでいくということも可能になります。子どもたちにとって意味のある内容を考えると、知的な刺激があり、新しい知識や概念が得られる活動が必要になってくると思うのです。そこでの教師の役割は、子どもたちが今発見したことを言語にどうつなげるかということだと思うのです。教師がきちんとサポートしないと、活動だけがあって後に何も残らないという結果になってしまいます。そのことを最後に協調しておきます。

【質疑応答】

Q. 先ほど先生が中国帰国者定着促進センターでお使いになったプリントをお示しくださいましたが、教科学習をしようと思っても、このようなワークシートを準備する時間がなく、困っています。こういう資料がどこかのホームページにアップされているとか、どこかで手に入るのでしょうか。

A. 残念ながら、誰もがアクセスできて、すぐに使えるようなものはないと思うんですね。先ほどのプリントにしても、図形の方はパソコンでいくらでも作れるのですが、白地図は著作権があるので、本当はこのようにお渡ししてもいけないものだと思います。先生方あるいは地域で作られた教材をどうぞ誰でもというふうにはできない状態だと思います。実際このワークシートを作るのは、先生がお一人でやろうと思うと、本当に大変なものだと思うんですね。そこで、もし例えばクラスの子どもたちがテストと称して県の読み仮名を振らなければならないとかっていうふうに先生がしてくださいって、その結果をこちらの日本語教室の先生に渡してくださったりというようなちょっとしたアイデアがあれば、もしかしたら手も省けるのかもしれないなどと考えます。

子ども自身が自分の使う教材を作るっていうことも考えてもいいと思うんですね。例えばこれはミカンとリンゴ産地の勉強をするためのものですけど、まず最

初に、都道府県がどこにあるか調べたいという授業をこの前にやっています。そのときに自分で書いて、それが次はこの授業のときの教材になるとか、そんな工夫ももしかしたらどちらかの教材づくりの手間と労力を省くことになるかもしれませんが、子ども自身は自分たちがつくったものが次にまた勉強で生かされるというのうれしいと思いますので、そんなふうな工夫されたいかがでしょうか。

Q. 小学校から中学校に来て、中学校の1年生の授業をイメージしていただくと大体わかると思うんですけど、ものすごくギャップがあるんですね、やっぱり。理科と社会の1学期の授業内容が余りにも小学校とかけ離れてしまっていて、特に漢字のレベルで、平城、平安とか縄文だとか、あそこの辺の内容がまずそこでくじけるというか、そこからちょっとなれていくと大分なれていくと思うんですけど、せめて1学期ぐらいの内容の教科書のルビだとか、そういったものがあるのかなり違ってくるし、理科の教科書について言えば、せめて融点、沸点だとか、あそこら辺の内容までいっていただけると、非常にルビなんかとか、ちょっとしたポルトガル語の意味だとか、そういったものがついているような教科書的なものがあるとその後は何とかこっちのほうでつなげると思うんですけど、そういったものもないのでしょうか。

A. はっきり言ってしまえば、先生方がつくらない限り、教材はありません。商売にならないのです。出版社からは積極的にそれを作って売るといふふうには今のところなりにくい。将来的にもっと国内に外国、定住型あるいは移民型の方々があふえてきて需要があって、供給すればそれで商売として成り立つという状態が来ない限り、待っていてもだれもやってくれないと思うしかないと思います。先生方も一生懸命なさっていますし、地域のボランティアの方々も一生懸命なさっていると思うんですが、そのあたりがもう少し組織的に動きながら作って、それを広げていくといえますか、享受していくようなことを考えるというのが今できる精いっぱいというか最大のことかなと思っています。

私は、もっと日本の子どもたちを活用してほしいと思っています。日本の子どもたちが言葉を共有できないがためにそこでどんなことが生じるのかということを知るために、日本の子どもたちがルビを振る活動とか

一生懸命やったらいいんじゃないかというふうに思っています。それからは自分たちが今度またある機会に、ほかの言語が通じない世界に行ったときに、自分がどういう経験をするのかということ、ある意味別の立場ですけれども、経験することにもなるんじゃないかと思うので、かかわっている人だけが一生懸命やるという発想じゃなくて、というよりは、かかわりはみんなにあるんだと思って、みんなに押しつけるぐらいのつもりで、いろんな可能性を探っていくというのがいいんじゃないかなというふうに思います。

【アンケートの結果】

参加者：108名（主催者側8名を除く）

- ・小中学校教員：21名
- ・語学相談員、教育委員会など学校関係者：17名
- ・日本語ボランティア現職者：49名
- ・その他(日本語ボランティア希望者、大学教員、大学院生等)：21名

アンケート回答者：81人（回収率75%）

(1)研修会の内容は期待に沿うものでしたか。

- ・期待以上で、とても満足した。：18名（22%）
- ・期待通りで、とても満足した。：31名（38%）
- ・期待通りで、まあまあ満足した。：28名（35%）
- ・やや期待はずれだった。：1名（1%）
- ・まったく期待はずれだった。：0名

（無回答：3名）

(2)今後、どのようなテーマの研修会をご希望ですか。

- 取り出し授業での成功例や課題など、取り出し授業に焦点をあてたもの。
- 公立学校に通う外国籍児童と外国人学校に通う外国籍児童、それぞれの日本語レベルの実態。
- 子どもと大人が混在する教室の授業の進め方のヒントを得られるような研修会。
- リソースの活用方法（学校現場で使える）＝教材の活用
- 保護者の人々の支援の方法を学校や地域はどのように関わればいいのか。子どもだけでは解決できない問題がたくさんある。そのようなテーマをぜひお願いしたい。
- 学校、ボランティア、それぞれの役割分担、どのような実情なのかなども知りたい。

○ボランティアと教員との関係

- 具体的な実践報告を聞きたい。参加者が実際に活動を体験できるような形で。
- 横のつながりが少ないので、試行錯誤しながら教えています。日頃の授業に活かせるような指導法を今日のビデオや模擬授業のような形など具体的に分かりやすく教えてほしいと思います。外国人の大人の方や日本語教師の研修は多いのですが、小学校の教員向けのものは少ないと思います。
- それぞれの学校の現状、カリキュラム、授業などを共有できるようなワークショップ。
- 数ヶ月の適応教育（3ヶ月から半年）の方がいいか、すぐに各教室へ入れた指導の方がいいのか、各方法の長短所について。
- 地域の日本語教室と学校との連携の実例があれば知りたい。
- 宿題・課題を持ち寄るのは大変ですが、お互いに知恵を持ち帰れるように、知恵のプリントがおみやげ交換できるような会ができるといいですね。
- 外国児童向けの教材開発について。実際に授業で使う教科書にどう手を加えていけばいいのか。
- レアリア教材を使ったカリキュラムの実例があれば見たい。
- (3)この研修会に関するご意見、ご感想をご自由にお書き下さい。
- 生徒のためにできること、やるべきことは本当にたくさんあるんだなと実感させられました。実際に教師の立場で実施されている方々の話、意見が聞けてとてもよかったです。
- ほとんど愛知の方ばかりだと思いますが、さすが層が厚いと思いました。こんなに多くの実践者が集う研修会はなかなか開催できません。
- 実情を聞いて現場は大変だと思いました。ボランティアでの関わり方しかできませんが、少しでも役に立つなら幸いです。
- グループの意見交換ができ、よかったです。
- ボランティアの立場からは実際の先生方の話を聞く機会があまりないので、とても刺激を受け、いい勉強になりました。
- 成人の学習者（初級）を担当しており、小中学生にまだ対応した経験はありませんが、とても参考になりました。学習テーマをどう展開するか、いろいろ

なヒントをいただきました。日本語習得と教科内容との並行学習が求められる現場の難しさも理解できました。質疑応答の時間に現場からの報告や具体的な声が聞け、よかったです。

- 愛知県が主催していますが、学校サイド（教育委員会等）からは何も今回の情報は流れてきません。学校は校長や教頭など管理職の姿勢によって対応が左右されるので、管理職対象の研修をぜひ年間通して行ってほしい。
- 日本の子どもにルビをふらせる活動など、子ども同士で助け合う視点がとても参考になった。外国籍の子は助けてもらい上手、日本語が得意な子は助け上手に育てていきたい。
- 最後に齋藤先生もおっしゃったのですが、現場の先生だけの報告でなく、せっかく地域のボランティアが参加しているので、どのような支援ができるのか、話し合いができればよかったですのではないのでしょうか。
- 日々の指導で苦しんでいましたが、他の学校の実践例や講師の先生のお話などをうかがって一筋の光が射したように思い、本当にこの研修会が開かれてよかったですと思います。これから自信をもって指導できるように、学校現場で実際に役立つような研修をどんどん開いてください。そして、さまざまな情報やネットワークの提示をお願いいたします。
- 継続して、資料を残しましょう。
- ビデオに出てきた中国帰国子女たちの日本語習得力は私が見ているブラジル人子女より相当高いものだと感心しました。あるいは、授業が下手なのでしょう。よく考えてみたいと思いました。
- 大変ためになりました。無関心な教員も自分のクラスに外国籍児童が入ると、慌てるか、指導せずか、になりやすい。日頃の（研修への）関心を高める方が必要ではないのでしょうか。
- 齋藤先生のアドバイスがとても適切でわかりやすかったです。ネットワーク作りが大切だと思いました。
- 1日あっても足りないですね。

【成果と見通しおよび今後の課題】

留学生センター、(財)愛知県国際交流協会、(財)名古屋国際センター、東海日本語ネットワーク、四者の連携事業は今年度が6回目となる。回を重ねるたびに参加者も増え、過去4年とも100人前後の参加者を得ており、この研修会に対する期待の大きさがうかがえる。地域の日本語ボランティア、小中学校教員や語学相談員等の関係者が同席しての研修会は、多様な情報を得る貴重な機会となっている。

今回の研修会では、21名の小中学校教員と語学相談員、教育委員会など学校関係者17名、計38名の参加を得たのが大きな成果である。また、質疑応答の時間に各学校の取り組みを紹介していただくよう事前をお願いしておいたことも好評であった。参加者に名札をつけてもらい、6人ずつが向かい合って座れるようにしたのも、参加者同士の交流のきっかけになればという配慮からであり、実際に休憩時間に情報交換ができた様子であった。しかし、地域の日本語ボランティアの取り組みや学校との関わりについては、時間の関係から、十分に議論することができなかった。参加者の半数近くが日本語ボランティアであることを考えれば、この点に対する配慮が欠けていたことは否定できない。全国的に見て、学校教員と日本語ボランティアが一堂に会する研修会は珍しいらしく、今後ともその特徴を活かして研修内容を工夫していきたい。

質疑応答の時間で印象に残ったのは、この地域の学校ではさまざまな実践が行われ、それなりの経験が蓄積されており、ある程度の成果を収めていることである。将来的には、愛知県や愛知教育大学のリソースルームにそのような情報が集まるようなシステムが必要になるだろうし、すばやく情報交換できるようなホームページの開設も必要になってくるだろう。そのためにも、この地域の実践例の報告を中心にした研修会を開催し、情報と経験を共有すること、研修会の成果を学校や関係機関にフィードバックするような取り組みが求められるだろう。今後、研修会の開催だけでなく、その成果をアピールする方法についても議論を深めなければならないと感じている。

平成19年度
名古屋大学留学生センター地域貢献特別支援事業

小中学校教員・日本語ボランティア現職者研修会 「文化間を移動する子どもたちのことばと学び」

愛知県をはじめとする東海地域は、「日本語指導が必要な外国人児童生徒」数が全国でもっとも多い地域です。今回の研修会では、年少者の日本語教育に長年携わり、今年度から愛知県でも JSL（第二言語としての日本語）カリキュラムの実践に関わっていらっしゃる齋藤ひろみ先生（東京学芸大学教育学部准教授）を講師にお迎えし、この地域における外国人児童生徒に対する日本語教育の改善にヒントとなるお話をしていただきます。

- 【主催】 名古屋大学留学生センター、(財)愛知県国際交流協会、名古屋国際センター、東海日本語ネットワーク
- 【後援】 愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会
- 【日時】 平成20年2月2日（土）
- 【場所】 愛知県三の丸庁舎8F 大会議室
TEL 052-961-7904 (財)愛知県国際交流協会交流課育成担当
名古屋市中区三の丸2丁目6番1号
地下鉄名城線「市役所」駅 5番出口から西へ徒歩5分
- 【日程】 12:45 受付開始
13:20 開会挨拶
13:30 講演 齋藤ひろみ氏（東京学芸大学教育学部准教授）
『「学習に参加する」ためのことばの力を育む
～文化間を移動する子どもたちへの内容重視の日本語教育～』
15:00 日本語教育リソースルームの紹介
15:10 休憩
15:40 コメント、質疑応答
16:30 閉会
- 【参加資格】 小中学校教員、日本語ボランティア現職者
- 【定員】 80名
- 【参加費】 無料
- 【申込み方法】 1) 別紙申込み用紙をファックスまたは郵送で。
2) E-mail による申込み
◆申込み・問合せ先◆ 名古屋大学留学生センター 浮葉正親
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel: 052-789-5771 Fax: 052-789-5100
E-mail: j46084a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp
- 【申込み締切り】 平成20年1月18日（金）